

錦織監督

映画の現場から



●●34

モンリオール世界映画祭レッドカーペット報告①

成田空港から空路12時間半でアメリカのワシントンDCに着いた私たち「渾身一行」はトランジットを経て約2時間でカナダのモンリオール国際空港に到着した。日本からの直行便はないのでアメリカの都市を経由して行かなければならない。

現地の気候は島根の奥出雲地方の夏、もしくは北海道の旭川の夏といったところか。空気が乾燥しているためか思った以上に過ごしやすい。カナダの人口は約3400万人。イエローナイフがつとに有名だがオーロラ観光ツアーの一番のお客さまはやはり日本からの

DESJARDINS

Catherine Ouesit



から) 成田空路12時間半でアメリカのワシントンDCに着いた私たち「渾身一行」はトランジットを経て約2時間でカナダのモンリオール国際空港に到着した。日本からの直行便はないのでアメリカの都市を経由して行かなければならない。

「日本代表」実感 自信に

観光客だという。出雲ピクチャーズも私も初陣である。心地よい緊張感とともに高揚感を感じながら、メイン会場のある市街地に向かった。

モンリオール市の人口約100万人、ケベック州の公用語は他の州と違いフランス語だ。ほとんどの市民が英語も話せるので街の看板は英語とフランス語が併記されている。

モンリオール世界映画祭(MWFF)は、他の映画祭が国際映画祭と謳うのに対し「世界映画祭」という。世界にこだわるのはそれだけ多くの国の映画を上映しているという主催者側の自信があるようだ。開催中は毎年カナダ国内全域はもとより世界中の国から25万人以上もの人たちが訪れる世界最大級の映画祭だ。

そして何より創設者のセルジュ・ロジック氏が健在でトップに君臨し、運営を牽引していることからその姿勢にブレがなく、政治や時流、コマーシャルイズムなどの外圧から見事に逃れられており、そこに尊敬が集まっていることがうかがえる。他の映画祭がスポンサーなどに翻弄されているのに比べ、見事に独立性を維持しているのが私たちのよ

うな作り手や観客にはうれしい限りだ。

ラッピングバスが市内を走り、街頭には旗がひらめき、市を挙げて盛り上げている様子が気分を盛り上げてくれる。何より多くの観客が、世界中から選ばれた作品に触れることができるので一様に目が肥え、観客自身が映画祭を育てているような印象すら受ける。観客はコマーシャルに影響されることがなく、自らの目で確かめるように、知らない国の知らない俳優が主演している映画に列をなしている。

映画「渾身」が厳しい審査をくぐり抜け、日本代表としてこの地にいるんだと強く感じる事ができ、大きな自信になった。ワールドプレミア上映が終わった翌日、創始者ロジック氏の部屋に招待された。ロジック氏との会話は1時間以上にも及び、「渾身」を細部まで見た上での評価がとてもうれしかったが、ある程度リップサービスだと思っていた。しかしクローシングイベント(授賞式)でロジック氏の評価を裏付けるようなミラクルが起こったのだ…。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載